

# 韻鏡の諸轉内外開合校訂

大 島 正 健

17  
26  
17

## 第一、内轉開。

享祿本開に作り、寛文本訂正韻鏡以後の諸本多く合に作り、七音略韻鑑は重中重に作る。重中重は即ち開に當るなり、従ふべし。

## 第二、内轉合。

享祿本開合に作り、訂正韻鏡以後の諸本多く合に作り、七音略韻鑑は輕中輕に作る。輕中輕は即ち合に當るなり、従ふべし。

## 第三、外轉開。

享祿本開合に作り、諸本多く之に従ふ。切韻指南に唇、牙、喉を開、舌齒を合に定むれど、此の説採るべからず。七音略韻鑑は重中重に作る。之に従へば開なるべきこと論無し。

## 第四、内轉閉。

享祿本開合に作り、諸本之に従ふもの多し。是れ唇音の合口音の如く聞こゆるを以て、宋人の誤りて、開合併置も見做したるものなるべし。麿光は此轉の晨音所屬の字の一部を第五の合轉の方に移せること、是れ私見を以て原本を改むるものと謂ふべし。七音略韻鑑は重中輕に作る。重中

輕は即ち開に當るなり従ふべし。

# 第十一、内轉開。

享祿本開に作り、訂正韻鏡以後の諸本多く合に作る。漢吳音圖享祿本に則りて、更に其の開なるべき證を挙げたり。是れ従ふべし。さすれば能く第十二轉と開合相對次す。七音略韻鑑は重中重にして開なり。

# 第十二、内轉合。

享祿本開合に作り、訂正韻鏡以後の諸本多く合に作る。七音略韻鑑は輕中輕に作り、合なるべきこと疑無し。

# 第十七、内轉開。

# 第十八、内轉合。

# 第十九、内轉開。

# 第二十、内轉合。

右四轉は七音略韻鑑、享祿本共に外轉に作る。訂正韻鏡之を内轉に改めたるは、蓋し據處ありたる處のなるべし。切韻指南康熙字典の如き書も、尙之を外轉と爲せど、深く信賴するに足らず。此の四轉は、内轉の特徴を具備し、外轉の性質を有せず。夙くより之を外轉と爲したるは、恐らくは誤記なるべし。後世の書は只何の理由無くして、其誤を踏襲したるのみ。第六、第七の兩轉對、第十七、第十八の兩轉又第九、第十の兩轉對、第十九、第二十の兩轉は、夫々無尾韻對、有

尾韻の關係に於ては同性質の轉なるに由り、其の無尾韻の方が内轉なれば、其の有尾韻の方も、内轉なるべきこと論難也。廣光始め之を内轉に作り、後外轉に改めたるは、却て當らず。

第三十六回外轉開

享祿本合に作れど其理由を發見するはと能はず。恐らくは誤記の傳はり來りたるものなるべし。

訂正韻鏡之を開に改め、其後の諸本多く之に従ふ。七音略韻鑑は重中輕にして開なり。

第二十七回内轉開

享祿本に合であるは誤記なるべし。寛永本開に改めてより、諸本多く之に従ふ。七音略韻鑑は重中重にして開なり。此轉開ならざれば、次の第二十八轉の合を開合相對次せず。貞享本校正韻鏡、此轉を外轉に作れど、従ふべからず。

第二十八回内轉合

校正韻鏡外轉に作れど、従ふべからず。

第三十九回外轉開

享祿本内轉に作ること誤記なるべし。寛永本外に改めてより、諸本多く之に従ふ。七音略韻鑑は外轉と爲す。享祿本此開轉に對する第三十の合轉を、外轉に作るを見れば、その誤記なるべきこと分明なりとす。

第三十七回内轉開

發聲獨り合に作れど、素より徒ふべからず。

## 第三十八、内轉開。

享祿本合に作り、寛永本開に作り、訂正韻鏡開合に作り、諸本一致する所なし。七音略韻鑑には重中重とあるに由り、開なるべきこと疑無し。

## 第三十九、外轉開。

享祿本開に作り、諸本之に従ふ。磨光獨り合に作るは非なりと謂ふべし。七音略韻鑑は重中重にして、開なるべきこと論を要せず。

## 第四十、外轉開。

享祿本合に作り、訂正韻鏡開に作り、他の諸本或は開に作り或は合に作りて一定せず。七音略韻鑑は重中輕にして開なり従ふべし。此轉合なるべき性質を見出すこと能はず。

## 第四十、外轉合。

享祿本合に作り、訂正韻鏡開に作り、是亦他の諸本開合未定せず。七音略韻鑑は輕中輕にして合なり、従ふべし。此轉は第三十九、第四十兩轉の開に對する合なりとす。

右は古來内外開合の別につき、異説ある韻鏡の諸轉に對して、校訂を施したるなり。

## 附記

一、七音略韻鑑。此書收めて鄭樵が通志略の中にあり。鄭樵は北宋末期より南宋初期に跨れる人なり。此書は鄭樵が原作に非ざるを明かにして、能く唐代の音韻を寫し、現存韻鏡中の最古の者に比して最も深く信頼を置けに足るべし。

一、享祿本。文永年間我國に傳はりたる、南宋の張麟之が指微韻鏡を、享祿年間僧の宋仲の寫本より翻刻したる、我國の韻鏡の原本なり。張麟之の韻鏡は宋音に據りたる痕迹ありて、訂正を要すべき所少からず。

一、寛永本。寛永五年の出版にして、享祿本に二三の訂正を加へたる書なり。

一、訂正韻鏡。寛文十一年太田嘉方氏の作に成り。舊本に對して獨立の訂正を試む。其見解當れる者あり、又當らざる者あり。大に參考と爲すべき價值ある書なり。

一、校正韻鏡。貞享二年西村重慶氏の作に成る。此書訂正韻鏡に則れる所多し。

一、磨光韻鏡。延享元年初版、僧の文雄の作にして、韻鏡の諸本中、最も廣く世に行はれ、治く人の知る所の書なり。

一、漢吳音圖。文化年間田田方氏の著はせる書なり。此書亦大に學者間に珍重せらる。

一、韻鏡發輝。天保年間、大澤實氏の著はせる書なり。臆斷に過ぎて採る可からざる僻見多く、信賴するに足らず。

右の外、遮中鈔、合類韻鏡、韻鏡問答集、韻鏡易解、韻鏡諸鈔大成、韻鏡袖中祕傳抄、韻鑑古義等韻鏡の書其數多しと雖も、發輝の如き者除きては既に參照に用ゐたる者と、大同小異なれば、別に其名を舉ぐべき要を見ず。